

～患者団体向けインフォメーション・セッションを開催～  
＜メディア対応のスキルアップを目的に「模擬記者会見」を実施＞

日時：2014年12月5日（金曜日）

場所：東京・千代田区

PhRMAは、日本の患者団体の方々への支援活動の一環として、去る2014年12月5日（金）、本年度3回目となる「インフォメーション・セッション」を開催しました。今回は今年のインフォメーション・セッションの総括として、過去2回のセッションで習得していただいたスキルを実践で活かしていくことを目的に、現役の記者の方々を講師としてお招きし、実際の記者会見を体験する場として「模擬記者会見」を実施しました。

2011年以降、PhRMAでは患者団体の方々へ向けて、当セッションを通じ、“他国の医療制度”や“保健制度の実情”、また“日本の患者団体による、医療政策に関する提言・参画事例”を紹介する講演やディベート・トレーニングやメディア・トレーニングなど実践的なスキルを身につけるためのワークショップを経験していただく機会を設けています。今回は普段の広報活動、特に記者会見のような場において、実践でお役立ていただけるようなプログラムとしました。

■講義『記者会見に臨む前に ～確認すること、気を付けること～』

石川 貴枝子氏（アツヴィ合同会社 広報部 シニアマネージャー）

はじめに、PhRMA加盟企業であるアツヴィ合同会社の石川氏より、記者会見で発表する際に気を付けるポイントについて講義がありました。記者会見時及びその準備について、近年のインフォメーション・セッションの内容を振り返りつつ、想定問答集、配布資料など準備段階で確認すること、発表時の手や顔の動きで気を付けることなどのお話がありました。講義中には頷きながら、メモを取る参加者の姿が多く見られました。

講師：石川 貴枝子氏

講義風景



■模擬記者会見トレーニング

＜参加講師（順不同）＞

小島 正美氏（毎日新聞 生活報道部 編集委員）

高橋 真理子氏（朝日新聞 科学医療部 編集委員）

田中 陽子氏（NHK 報道局科学・文化部 記者）

模擬記者会見トレーニングでは、事前に応募があった5団体による発表が行われました。また、当日発表を行わない参加者は、「記者」の立場になり、それを自身の発表時に活かしてもらうことを目的に「記者役」として参加し

ていただきました。

1団体毎に発表を実施し、講師と記者役による質問に発表者が答え、最後に講師が講評をするという形式でトレーニングは進みました。各団体ともに事前の講義であった注意事項を意識しながら発表していました。また記者役からは、現役の記者である講師も頷くようなするどい質問が次々と投げかけられ、活発な模擬記者発表の場となりました。

模擬記者会見風景



模擬記者役(参加者)質問風景



講師から講評風景



### ■ 模擬記者会見総評・質疑応答

続いて、模擬記者会見後、3名の講師より全体の発表を振り返っての総評をいただきました。総評では発表者の「話し方」が大変高く評価された一方で、発表内容については、『まず記者会見で何を訴えたいのか、誰に訴えたいのかをより明確にする必要がある』、また『訴えたい内容のポイントを絞らなければならない』という現役記者ならではのフィードバックの他、小島氏からは、良いプレスリリース例の紹介がありました。

質疑応答では、参加者から、記者の目にとまる見出しの考え方、言葉の選び方に関する質問や、記者会見を想定した場合に配布する資料に関する質問などがあり、3名の記者からそれぞれ回答がありました。質問者やその他の参加者も真剣に耳を傾け、深く頷く姿が見られました。

講師:小島 正美氏



講師:高橋 真理子氏



講師:田中 陽子氏



模擬記者会見総評・質疑応答 風景



## ■ネットワーキング

その後、疾病領域が異なる患者団体同士の交流の場として「ネットワーキング」の時間を設け、講師の方々にも加わっていただき、自由にコミュニケーション・情報交換を行っていただきました。リラックスしたムードの中、今回の模擬記者会見に関する質疑応答の続きなどの話題も聞かれ、活発な交流の様子が伺えました。

今回は、24団体34名の患者団体の方々が参加されました。参加者の方々からは「何を伝えるべきか明らかにしないと伝わらないということがよく認識できた。記者会見のことも実感できたし、模擬記者会見は非常に面白かった。」「全体的に自らの疾病の基本は自明と考えてしまっているところがあったので、その点を理解できてよかった。」「見出しやポイントの表現など勉強になりました。」等、今後の患者団体の広報活動の改善につながりそうなコメントが数多く寄せられました。